



## 遠隔システムを活用した他校との交流授業

北海道北見商業高等学校 山田美智子

### はじめに

教科「商業」では「商業の見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を行うことなどを通して、ビジネスを通じ、地域産業をはじめ経済社会の健全で持続的な発展を担う職業人として必要な資質・能力を育成すること」を目指しています。「実践的・体験的な学習活動」においては、産業界関係者などとの対話や生徒同士の討論といった自らの考えを拡げ深める、様々な知識、技術などを活用して、ビジネスに関する具体的な課題の解決策を考案するなどの学習活動を実践する必要があります。

しかしながら、広域分散型の地域特性を有する北海道においては、地域の企業と連携した産業現場等における実習の機会や学校間の連携を図ることが難しい場面もあるため、各地域の商業教育の中心となる学校が適切な相互補完と役割分担により、広域的な連携を進めていくための仕組みづくりが必要不可欠です。「学校と企業」や「学校間」を繋いで最先端の職業教育を推進する中で、ICTはこの仕組みを支える一つのツールとなると考えます。まさに企業と一体となった教育課程、教師の資質・能力の向上、そしてデジタル化対応装置の環境整備の取組こそが、デジタルトランスフォーメーション等に対応する地域の産業界を牽引する職業人材の育成を目指す「スマート専門高校」であります。

北海道では、商業に関する学科を設置する6校（札幌東商業、旭川商業、苫小牧総合経済、函館商業、釧路商業、北見商業）にコラボレーション

実習設備を導入し、学校間をテレビ会議（配信）システムで結び、地域特性を踏まえながらも広域的な連携を進めるための環境を整えました。

導入されたコラボレーション実習設備を活用し、学校間や企業等をテレビ会議（配信）システムで結ぶことにより、生徒が多様な意見にふれ、様々な体験を積む機会を増やすなど、教育の質の更なる向上につなげることが可能となり、職業人材の育成の起点となることが期待されます。

### 1 「スマート専門高校」とは

#### (1) 「スマート専門高校」

「スマート専門高校」とは、Society 5.0 時代における地域の産業を支える職業人育成を進めるため、学校内にデジタル化対応装置の環境を整備することにより、最先端の職業教育を行う専門高校です。「スマート専門高校」を実現し、デジタルトランスフォーメーション等に対応した地域の産業界を牽引する職業人材を育成することを目的として、北海道では、商業に関する学科を設置する6校（札幌東商業、旭川商業、苫小牧総合経済、函館商業、釧路商業、北見商業）に高性能 ICT 端末等で構成されるコラボレーション実習設備を導入しました。

#### (2) コラボレーション実習設備の概要

コラボレーション実習設備は、マイク、スピーカー、カメラ、タッチスクリーンが一体となったオールインワン「Meeting ボード」をはじめ、ライブ配信機器、テレビ会議を支援する放送設備、教室の壁面に大きくプロジェクターを投影するこ



オールインワン「Meeting ボード」

とが可能な「壁面大型スクリーン」, 「テーブル付きチェア」等から構成されています。

このオールインワン「Meeting ボード」の主な機能を紹介します。

(ア) 電子黒板・電子ホワイトボード機能

専用のタッチペンとスクリーンで、紙と鉛筆、黒板とチョークをイメージした書き込みができ、板書データをPDFファイルとして簡単に保存が可能。また、付箋機能によりテキストメモを転送し、共有することが可能。

(イ) プレゼンテーション機能

ワイヤレスで端末と繋がり、プレゼンターと参加者が1つのデバイスを共有しているような感覚で、双方向からプレゼンテーション資料を操作できる。接続端末もパソコンに限らずスマートフォンの画面をアプリケーションを利用して映し出すことも可能。

(ウ) テレビ会議（配信）システム

電子黒板やプレゼンテーション画面の共有をはじめ、投票機能・タイマー機能・画面録画機能等を搭載し、さらに一般的なパソコンで用いられているOSが搭載されるためパソコンを準備することなく、手軽にテレビ会議の実現が可能。

### (3) コラボレーション実習設備を活用したビジネス教育について

コラボレーション実習設備に期待される役割の一つが「遠隔地間におけるビジネス教育」です。コラボレーション実習設備を活用することで、広域分散型の地域特性を有する北海道においても、生徒が多様な意見にふれ、様々な体験を積む機会を増やすなど、教育の質の更なる向上につなげることが可能となり、職業人の育成の起点となり得

ると考え、様々な学習例を考えました。その中でも本校で行った授業実践について紹介します。

## 2 授業実践

### (1) 「ビジネス・コミュニケーション」

この授業実践は、北海道商業教育フェアの事務局を担当した苫小牧総合経済高校の生徒が次年度の北海道商業教育フェアに参加する本校の生徒に対して、接客の際の心構えや販売に必要な商品知識の重要性などを伝えるものです。経験談を聞くことにより、販売活動における接客において効果的な方法及びホスピタリティについて学び、必要な心構えを考えることをねらいとしました。

また、本校の生徒は事前に応答に関するビジネスマナー、接客に関するビジネスマナーを学び、知識を習得した上でこの授業に臨みました。

授業後の感想では「接客の準備をしても、それを上回る質問などがあることを知り、大変だと思った。」「販売活動を行うには色々準備が必要だと思ったし、日常的に行っていることや授業に関係ない経験も生かせることを知ることができた。」「教科書で接客は商品知識が大事って書いてあったが、本当にそうだった。その商品について色々な角度からの情報が必要だと思った。」「身だしなみは本当に大事なことだとわかった。普段から気をつけようと思った。」「ということがあげられました。

同じ内容を教員から指導されるのとは違い、高校生から教えてもらうことでより身近に感じることができ、生徒自身が自分事として考えられるようになったと感じます。

また、この授業後に行われた北海道商業教育フェアに参加した生徒は、身だしなみや挨拶など基本的なこと、商品知識など考えられる準備をして参加しました。そして、想定外のことが起こるかもしれない心の準備をしておいたことで、状況に合わせた判断を行うことができたそうです。教えてもらったことを実際に活かして、主体的に考えて行動できたことが大きな成果だったと思います。



苫小牧総合経済高校の様子（講師の立場）



本校の様子（受講者の立場）

## （2）「課題研究」

この授業実践は各校の課題研究で作成した作品である、ポスターや学校紹介動画について他校の生徒にプレゼンテーションを行い、その感想を伝え合うことで作品の完成度をより高め、他校生徒との対話を通して自らの考えを深め、新たな考え方ができるようになり、柔軟な思考が身に付けられることをねらいとしました。

遠隔地の生徒と交流し、意見交換をすることがねらいでしたが、機器の操作に手間取ってしまい、交流の時間が短くなってしまいました。短い時間の中でしたが、お互いの作品についての意見交換をしたことで、新しい視点を発見することができていました。本校生徒がポスターを制作しましたが、この交流の前に、自校の生徒にポスターについてのアンケートをとっていました。そのアンケート結果と、他校生との意見の違いを知ることができ、他者の意見を尊重すること、多様な考え方があることを知ることができました。

この時に参加した本校生徒は同じ商業を学ぶ他校生との交流がなかったので、交流できたことを純粋に喜んでいました。商業を学ぶ生徒であるからその共通点や、生徒数の違い、男女比の違いなど、些細なことでも驚き、楽しそうにコミュニケーションをとっていました。また、同じ北海道にある高校ではありますが、約300km離れているので、お互いの町の情報交換をすることで、自分たちの住んでいる地域の魅力の再発見などを行うことができたので、生徒にとって充実した時間を過ごすことができたようでした。



【苫小牧総合経済高校】本校生徒のポスターをみて、感想やアドバイスを伝える



【本校】苫小牧総合経済高校の生徒からの意見を電子ホワイトボード機能を使用して記入する



記入後の画面

### 3 生徒の感想の共通点

今回の遠隔交流を通しての生徒達の感想で共通していたことは、「新たな知識を得ることができた」「同じ高校生なのに相手校の作品のレベルが高くて驚いた」など、「同じ高校生なのに自分たちより高度な内容・完成度の高い作品を制作している」という尊敬の気持ちが表れていた点です。「初対面の相手との交流では、普段は体験できない緊張感があった」「初対面の相手に作品の発表をするので、普段以上に準備やりハーサルを入念に行った」など、普段の学校生活ではできない経験ができたということ、「わかりやすい伝え方の工夫、相手にわかりやすいリアクションはどうすればいいか」という他者の視点を意識した態度の在り方について考えるきっかけとなったという点です。また、画面を通してではありましたが、同世代の高校生との交流によって、身だしなみが相手に与える印象の重要性、普段の授業で指導されていることと共通した内容が出てくることにより、その重要性を再認識することができたことです。

これらのことから、遠隔交流によって北海道内の商業高校の学習内容の特色や共通点を生徒同士が認識し、ともに商業を学ぶ生徒としての連帯感を持つことができると考えられます。また、こうした「学び合い」は、空間的・地理的制約を緩和することができ、クラスや学校といった枠を越えた環境下での活動が実現できると実感しました。そうした学習活動によって、生徒達が新たな気付きを得ることができ、多様な他者と協働しながら、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を実現することができると考えられます。

### おわりに

今まで操作をしたこともない、どのような可能性があるか未知数の機器を使い、新しい授業展開を創造していかなければならないため、教員側の機器の理解を深める必要がありました。機器の理解を深めた上で、どういった使い方がよいのか、どういう機会を活用していくかを考え、その一部を実践することができました。本校だけでは実現できなかったことだったので、協力していただいた高校に感謝しています。

授業を行ってみて、学校にいながら他校生と交流し、互いに学びあうことができるのは大きな教育的効果があると実感することができました。しかし、遠隔授業を行うにあたって、学校間での授業時間が違うので、その調整などが必要となりました。授業時間の問題がクリアできると、より専門的なことを学ぶ機会や、北海道内にとどまらず日本中や世界中の人たちとの交流ができるようになり、生徒の視野や考え方を広げることができるようになるのだと考えました。いつか実践できるように尽力していきたいと思います。

最後に、ご指導ご助言、資料を提供していただいた関係各位、また遠隔授業等にご協力いただいた先生方に感謝申し上げます。